はじめに

本号は、昨年度のスポーツ科学研究室の研究活動の成果である。

「グローバリゼーション」をサブタイトルに組み込むのは、1997 年、1998 年、2000 年、2001 年に続いて 5 度目となる。これは、科学研究費のテーマとの関係という点に留まらず、「グローバリゼーション」が現代社会におけるスポーツを読み解く上でのキーワードとなるという問題意識の表象でもある。

同時に、「グローバリゼーション」が現代のスポーツを分析する上で基軸的な概念たり得るかについては今後とも議論していかなければならないと考えるものである。これまでの本研究年報においても表明されてきたように、共同研究の中でグローバリゼーションの定義について統一的な理解や見解が確定しているわけではない。そもそもグローバリゼーションとは多義的な用語であり、現在では「反グローバリゼーション」が理論的にも実践的にも追求されるという側面もある。

スポーツ事象が国家の枠組みを超えて地球規模で生起している現実がある一方で、グローバリゼーションとは相対的に独立して展開するスポーツ事象が存在する。これらの現実態とその相互関連をとらえていくには、いくつものハードルを越えていかなければならない。本号は、われわれの研究の現在位置を確認する作業課題の現われであり、一つの通過点であるととらえている。

今年度、本研究年報にとって大きな変化がある。刊行物にとっては「顔」ないしは「看板」ともいえるタイトルの変更である。

1982 年の刊行以来の『研究年報』を、第 22 号となる本号から『一橋大学スポーツ研究』と変更し、英文タイトルを *Hitotsubashi Annual of Sport Studies* とした。あわせて、各論文や研究ノートの欧文タイトルも掲載することとした。

発端は、「(旧) タイトルでは、一見しただけでは内容や編集発行の主体が分かりにくい」という単純明快な意見表明であったが、幾度かの議論と意見交換を経て最終決定を見た。

来年 4 月から国立大学は独立行政法人へと移行する。多くの人々が評してきたように、近代国家制度が整備されていく中で設置されてきた国立大学、その設置以来の根本的な大転換である。法人化が議論されるようになって以来、数多くの疑問や問題点が指摘されてきたが、未だ不透明な部分や未解決の部分を残しての法人化にはさまざまな困難な事態が起こってくることも予測され、われわれの研究、教育の体制にとっても重大な問題である。

同時に、大学内部からの自己変革を否定するものではない。これまでの教育、研究、学内行政の蓄積の上に立って、真の意味での大学改革に取り組んでいく必要がある。われわれの研究室では、本研究年報の刊行に示されるように、長年、共同研究の成果を世に問うてきた。研究面のみならず、教育面においても集団的討議を経て年度末に『われわれの教育活動』をまとめるなど時代を先取りしたと自負しうる活動を行ってきた。こうした集団的な取り組みを継続するとともに、さらなる発展が求められている。

2003 年 8 月 20 日　　一橋大学スポーツ科学研究室室長　　尾崎　正峰